

【寄稿】

# 陸上イージスは核ミサイルを撃墜できるのか 〜 天空で核爆発がおこり、日本を襲う公算〜

藤岡 惇（元立命館大学教授）



昨年四月末に米国は、韓国に高高度迎撃（サード）ミサイルを配備しました。サードは、四〇〜一五〇キロの高度で敵ミサイルを破壊し、撃墜するタイプのミサイルです。

一二月一九日には米国側の働きかけを受け、安倍政権は、秋田県と山口県に二つの陸上イージス基地を建設し、SM3（ブロック2A）という迎撃ミサイルを配備するという決定を下しました。到達高度は一〇〇キロに達し、秒速五キロで飛びます。発射を支えるイージス艦の諸機能も陸揚げしますので、二千億円以上の支出が予定されています。

米国は何のために韓国にはサードを配備し、日本には陸上イージスの建設を求めたのでしょうか。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）にとどまらず、中国・ロシアの核ミサイルも、米国の戦争システムの中核（グアム、ハワイ、米本土・宇宙）に狙いを定めています。核交戦となつたばあい、これらの核ミサイルが米国の戦争システムの中核に届く前に、日本の防衛省に命じて、上空でブロックさせ、撃墜させるためです。日本上空を通過する段階で、核ミサイルは二〇〇キロ以上の高度に達しますので、サードでは間尺にあわなかったのです。以下、対象を北朝鮮の核ミサイルに絞って

説明していきます。

陸上イージスの使命は、日本国民の生命と財産を守ることはありません。米国の戦争システムを北朝鮮の「報復攻撃」から守ることが使命なのです。なぜ「報復攻撃」なのか。核ミサイルを放棄しない北朝鮮側の核施設や首脳部の隠れ家に対して、まず米国側が奇襲の「首切り」攻撃を敢行する。これをきっかけに六四年間休戦中の朝鮮戦争の再開に至り、「地獄の門」が開くというのが、最有力のシナリオだからです。

先制攻撃にさらされた北朝鮮は、当然、核ミサイル発射で対抗しようとするでしょう。果して北の核ミサイルをSM3で撃墜できるのでしようか。過去の迎撃実験の実績から判断する限り、撃墜できる可能性は高くありませんが、ここでは北の核ミサイルを撃墜する勢いで、SM3が接近すると仮定しましょう。

北朝鮮側には対抗手段はないのでしようか。いや、あります。迎撃ミサイルの接近を感知したら、

ただちに爆発を起こせる感応装置、いわゆる「近接信管」を核ミサイルに搭載しておけばよいのです。近接信管を備えた砲弾は、敵機の近くに来ると、命中せずとも爆発するので、大戦中に日本軍機的大量撃墜をもたらす功績をあげました。最近では性能が向上し、瞬時に反応することができます。

核反応の世界は、日常体験の世界とはまったく異質です。核反応は化学反応の数千倍の速さで進み、わずか百万分の一秒で終わります。強力な水素爆弾のばあい、五段階の核反応が必要ですが、それでも所要時間は一〇万分の一秒程度でしょう。

火星15号のデータにもとづき、北朝鮮の核ミサイルは秒速四キロで飛ぶとし、これに正面衝突する勢いでSM3が秒速五キロで近づくと想定しましょう。両者は一秒につき九キロメートルの速度で接近することになります。あと一メートルで衝突という時点で、北のミサイルがSM3の接近を感知し、核爆発を開始したとしましょう。一〇万分の一秒が核爆発の所要時間ですから、わずか九

センチメートル近づいた時点で、核爆発は終わってしまいます。S M 3 が核ミサイルを追尾する形となれば、一センチメートルも追いつけない間に、核爆発は終わるでしょう。

核ミサイルの自爆は、日本のはるか上空の宇宙空間で行われる可能性が濃厚です。そうなると、直下に位置する日本には、どのような影響が及ぶのでしょうか。

地球表面から二一キロから四〇〇キロの高度で、米国は、一九五八年に五回、一九六二年には九回、合計一四回の核実験（うち五回は失敗）を行いました。宇宙核爆発を起こせば、近くを通過するソ連のミサイルに不都合をひきおこし、「ミサイル防衛」に成功する、という仮説の実証が目的の一つでした。

爆発直後に天空に血のように赤いオーロラが現れ、重力の作用で地球の周囲には「土星の環」のような高放射性粒子の輪が形成され、数カ月も消えないことが分かりました。核爆発の発する放射

線と熱線は、人工衛星だけでなく、地上の電気回線にも致命的な影響を与えることも判明しました。宇宙実験は「悲劇の黙示録」を示したのです。その結果、宇宙を舞台とするミサイル防衛計画は中止され、沖縄・嘉手納の核爆弾庫を守るミサイル防衛基地八カ所から核迎撃ミサイル・ナイキハークュリーズが撤去される一因となりました。

北朝鮮の核ミサイルが日本のはるか上空で自爆することになれば、六〇年前の事態が再現されることになるでしょう。核爆発が放つ放射線は、気体分子と衝突するなかで、強力な電磁パルスを生み出し、人工衛星の各種機能をマヒさせ、日本全土の電気回路、コンピュータネットワークを大混乱に陥れます。電気通信や交通は途絶し、GPS はマヒし、スマホは繋がらず、停電が続き、冷凍食品は腐り、疫病がまん延するなど、日本全土は、深い「核の闇」に数カ月ないし数年間、閉ざされてしまう可能性があります。S M 3 が核ミサイルに接近できたとしても、核ミサイルは「妖龍」に

変身し、天空から「核の雷撃」を下し、日本を「核の闇」に引きずり込む算が大なのです。

たしかにイスラエルの築いた「鉄のドーム」のように、通常弾頭ミサイルやロケット砲程度であれば、迎撃することは不可能ではないし、撃墜に失敗しても、大した影響は生じないでしょう。ミサイル防衛推進陣営は、この種の事例を用いて、核ミサイルの迎撃・撃墜を正当化してきました。しかし核ミサイルの場合、撃墜は本当に可能なのでしょうか。

かつてアインシュタインはこう警告しました。

「核の時代は、すべてを変えてしまったが、人々の考え方だけは昔のままだ。ここに最大の危険がある」と。核ミサイルと非核ミサイルとの間には決定的な違いがあることを見抜き、「核交戦には勝者はいない、共滅あるのみ」という真実の直視から出発したいと思います。日本政府には、専守防衛の枠を厳密に守り、外交交渉に力を注ぐことを要求しましょう。米国政府には、北朝鮮の体制転

覆のための軍事行動を起こさないこと、「朝鮮戦争を終結させ、平和条約を結んでほしい」という北朝鮮側の要請に誠実に応えることを求めたいと思います。これこそが、「信頼・共生」を経て「非核の東北アジア」に至る出発点だと考えるからです。

(二〇一八年一月七日)



藤岡 惇

(ふじおか あつし)

一九四七年生まれ。京都大学経済学部、同大学院経済学  
研究科修了。経済学博士。立命館大学名誉教授。国際N  
GO「宇宙の軍事化と核戦場化に反対する地球ネット  
ワーク」理事。藤岡の著作は、<http://www.peaceful.biz/>  
にアップしてあります。「地球ネットワーク」の活動は、  
<http://www.space4peace.org/>